



友の会だより №27

(2014年12月18日発行)

自転車文化センター

〒141-0021 東京都品川区上大崎 3-3-1

TEL 03-4334-7953 / FAX 03-4334-7958

Email bccask@jifu.jp

OPEN 9:30~17:00 (最終入館 16:45)

CLOSE 月曜日(祝日の場合は翌平日)・年末年始

『2015 ハンドメイドバイシクル展』

平成26年度企画催事

ハンドメイドバイシクル展を下記により開催いたします♪

- 開催日 : 平成27年1月24日(土)・25日(日)
- 開催場所 : 科学技術館1階 1・2・3・4号催事場
(東京都千代田区北の丸公園 2-1)
- 開催時間 : 午前9時30分から午後4時50分まで
- 入場料 : 無料
- 内容 : 乗り手の体格・目的に合わせ、注文生産で世界に1台だけの自転車を創り出す『ハンドメイドバイシクル』。我が国の伝統工芸のように高い技能を持った匠達の職人技、ハンドメイドビルダー並びにパーツメーカーの高い技術と自転車に対する深い造詣、そうした匠の技を多くの方にご覧頂きたいと思います。
開催内容といたしましては、★ハンドメイド車の展示／トークショー・座談会／ハンドメイドバイシクルのしくみ展示コーナー等を予定しております。
♪皆様のご来場をお待ちしております♪

昭和が語る自転車展

激動の「昭和」・・・日本における社会情勢の変動に応じ進化・発展をし、人々の暮らしに貢献してきた自転車・・・
昭和期の様々な自転車とその時代背景を紹介しています。
『懐かしさ』又は『古き』を知る、そんな空間に是非一度お立ち寄り下さい。

BCCライブラリー・ギャラリーにて平成26年12月27日迄開催中！！



特別展示予告

＜ハンドメイドバイシクルの魅力展＞

- 世界に1台だけの自転車を創るハンドメイドバイシクルの魅力をお楽しみ下さい。
- 開催期間 : 平成27年1月16日(金)から3月25日(水)
9時30分から17時まで(最終入館16時45分まで)
- 開催場所 : 自転車文化センター1Fギャラリー・ライブラリー

平成26年度 第6回自転車セミナー開催



松田 志行（マツダ シコウ）

1945年11月23日生まれ。株式会社マツダ自転車工場、代表取締役。

1975年より競技用自転車の製作を開始。1980年に(公財)JKA（元日本自転車振興会）に登録。

その際、フランス古語で、「自転車」を意味する”leVelo”を基に”LEVEL”（レベル）ブランドを立ち上げる。

また、1984年に製作された”オール内蔵レーサー”で国内外を驚愕させる。

2000年、荒川区技術功労者賞「荒川マイスター」を受賞。

2003年、東京都優秀技能功労者賞「東京マイスター」を受賞。

現在、マツダ自転車工場を「普通の会社」にするために奮闘中！

講師 松田 志行氏＜株式会社マツダ自転車工場 代表取締役＞

テーマ ～松田の自転車づくりと考え方～

*乗り手の求める、あるいは自らの着想を試行錯誤してデザインし、熟練の技で形にする。
松田流ハンドメイド自転車のつくり方と、自転車の持つ可能性に賭ける熱い想いをお話して頂きます。

日時 2015年2月18日（水）18：00～19：30（開場 17：30）

会場 自転車総合ビル 6階 601 会議室（東京都品川区上大崎 3-3-1）

参加費 セミナーのみ 1,000 円・セミナー&懇親会 2,000 円（当日受付にてお支払下さい）

定員 60名（先着順）

◆お申込み方法等詳しい詳細は、下記BCCホームページにてご確認ください。

<http://www.cycle-info.bpaj.or.jp>

寄贈資料の紹介

- ・ 行川様（東京都） タオル（競輪関係）3点
- ・ 山内様（神奈川県） 木製看板（ブリヂストン自転車）1点
- ・ 栗田様（神奈川県） 自転車（タンデム・ディスプレイ用オーディナリー）2台

自転車文化センターでは、寄贈された貴重な資料を大切に保管し、特別展示等を通じてご覧いただける機会を設けております。

科学技術館入館チケット（招待券）プレゼント！

科学技術館（千代田区北の丸公園）「2F 自転車広場」には、当センター所蔵の歴史的自転車などの常設展示を引き続き行っております。ぜひお立ち寄りください。

♡友の会会員の方に科学技術館入館チケット(招待券)を先着 10 名様（お一人様 2 枚まで）に差し上げます。
自転車文化センター(目黒)にご来館のうえ、インフォメーションカウンターまで、お申し出ください。

新着図書のご案内

- 「白い自転車、おいかけて」とっておきのどうわ (松井ラフ・狩野富貴子著 / PHP 研究所)
- 「折りたたみ自転車&スモールバイクカタログ愛車に出会える! 必読最新モデルカタログ 2014」(辰巳出版)
- 「折りたたみ自転車&スモールバイクライフ 2014」(辰巳出版)
- 「旅自転車とランドナーの本」いま買えるランドナーが、この一冊すべて(柊出版社)
- 「放浪哲学」11年かけて130カ国15万キロの自転車(中西大輔 著 / SBクリエイティブ)
- 「カミさんと走った500日 世界の自転車の旅」(宮田固 著 / めでいあ森)
- 「自転車事故の法律相談」(高木宏行・岸郁子 著 / 学陽書房)
- 「偽りのサイクル」堕ちた英雄ランス・アームストロング(ジュリエット・マカー、児島修 著 / 洋泉社)
- 「自転車に冷たい国、ニッポン」安心して走れる街へ(馬場直子 著 / 岩波書店)
- 「キューバ自転車横断紀行」(小林建一 / 彩流社)
- 「ツール・ド・フランス」(山口和幸 著 / 講談社)
- 「シルバー夫婦のきままなヨーロッパ・サイクリング記」(高桑明 著 / 風詠社)
- 「大東京ぐるぐる自転車」(伊藤礼 著 / 筑摩書房)
- 「ツール・ド・フランス 新世代が受け継いだ100年目のマイヨジョーヌ 2013」(柊出版社)
- 「Cyclo Graph ヴィンテージバイクの祭典エロイカ 2012 Winter」(櫻井朋成・星野成人 著 / ホビージャパン)
- 「夫婦2人で世界一周自転車旅行」(青木史也 著 / 彩図社)
- 「ツール・ド・フランスってこういうレースだったんだ!」(ダイアプレス)
- 「いい大人のサイクル&トレイン」(徳間書店)
- 「初心者のためのロードバイク&クロスバイク メンテナンスBOOK」(塩田崇雄 / 成美堂出版)
- 「ツール・ド・フランス 100話」(ムスタファ・ケスス、クレマン・ラコンブ著 / 白水社)
- 「50の名車とアイテムで知る図説自転車の暦」(トム・アンブローズ、甲斐理恵子 著 / 原書房)
- 「黒須バイク購入完全ガイド 徹底インプレッション 30台&2015年最新モデル 2015年版」(コスミック出版)
- 「自転車レストア&クロモリバイクカスタム」(柊出版社)
- 「自転車物語スリーキングダム」(角田安正 / 八重洲出版)
- 「輪行徹底ガイド」(八重洲出版)
- 「ツール・ド・ランス」(アメリカン・ブック&シネマ)
- 「自転車 for Beginners」人気ブランド・有名メーカー対応失敗しない100%ムックシリーズ(晋遊舎)
- 「MTB日和 乗るのがもっと楽しくなっちゃう! カスタムで、世界にひとつの愛 vol.20」(辰巳出版)
- 「MTB日和 なに着て山にでかけよう? 十人十色の山ウエア vol.21」(辰巳出版)
- 「自転車日和 Vol.33 今選びたい、自分にピッタリの1台! 最旬! 街乗り自転車」(辰巳出版)
- 「弱虫ペダル」34~36巻(渡辺航著 / 秋田書店)

「BCC友の会」会員募集中♪

自転車に関する書籍など、約9000冊を所蔵しています。会員登録をしていただいた方に限り、図書の自由閲覧をすることができます。会員各位におかれては、ご友人様などご紹介頂けたら幸いです。

【休館日】

月曜休館 (祝日は開館し、翌平日が休館となります)

1月 5日、13日(火)、14日(水・臨時休館)、19日、26日
2月 2日、9日、16日、23日

☆年末年始のお知らせ 年末 12/27 まで年始 1/6 から

1 はじめに

明治36年の読売新聞に連載された小杉天外の小説「魔風恋風」、その主人公である女学生萩原初野が自転車で現れるシーンでは「デードン色の自転車に海老茶の袴、髪は結流しにして、白リボン清く、着物は矢絰の風通、袖長ければ風に靡いて」とあり、その姿が単行本の挿絵に描かれています（写真1）。また同じく新聞に連載された小栗風葉の小説「青春」の主人公小野繁も女学生で、「家庭上なり社会上なり、丁度此の過渡時代に居る日本婦人の新理想といふものも、行々現今の女学生から建設されるべきで」とあり、女学生が新たな時代を担う女性と見られていました。



写真1 「魔風恋風」挿絵

現代でもテレビ等の影響によるものなのか、「ハイカラさん＝自転車に乗る女学生」というイメージを持たれる人もいます。「ハイカラ」という言葉を広辞苑で調べてみると【ハイカラ high collar たけの高い襟の意 ①西洋風を気どったり、流行を追ったりすること。また、その人。②日本髪に対して、西洋風の婦人の束髪。③洋風でしゃれていること。】と書かれています。

新たな時代を担う女学生が西洋風の髪型で、自転車に乗ることが洋風でしゃれているため、宣伝効果がよいと思われたのでしょうか、当時の広告媒体としてチラシなどに結び流しの髪に袴をはいた女学生が自転車に乗っている姿が見られます（写真2・3）。しかし、本当に当時の女性特に女学生はこのような服装・髪形姿で自転車に乗っていたのでしょうか。

そこで、最初に明治期の女性のための教育機関・服装・髪型の変遷を振り返り、次に女性が自転車に乗っている記事・絵などを使って検証してみます。



写真2 引き札



写真3 広告清輪第1号 明治38年

2 明治期 女性のための教育機関

明治期において、学ぶ所すなわち学校に通う女性に対してどのように呼ぶか、稲垣恭子は「主に旧制の高等女学校や女子専門学校などの高等教育機関に在籍する生徒・学生を総称することば」¹⁾として「女学生」を用いており、難波知子は「女子生徒」を用いています²⁾。「女子生徒」ということばは現在の中高校生でも使われていることから、本稿では「女学生」を用います。

江戸末期において、出石、豊岡、福山、名古屋などで「女学」設置を企てる藩が現れていますが、実際に女学校が創設されたのは開国とともに渡来した宣教師によるものでした。明治元年（1868年）（以下明治という元号は省略します）神戸女学院（神戸）、同志社女学校（京都）、3年（1870年）A六番女学校（東京）、フェリス女学院（横浜）などです。

これに対して公立の女学校は4年（1871年）、東京芝に開拓使庁の所管による北海道開拓事業を進めるために開校した開拓使女学校が最初です。同校は12歳から16歳の女子を対象としており、8年に札幌に移転しましたが9年（1876年）に閉校になっています。5年（1872年）

2月に東京女学校が、4月に京都の新英学校女紅場が開校しています。8月に「学制」が頒布され国民皆学となり、近代的教育制度が始まりましたが、この中には特に女子教育のための取り決めはありませんでした。

8年（1875年）11月、文部省所轄の東京女子師範学校が東京本郷に開校しました。その間にも公立、私立の女子のための学校が設立され、13年（1880年）までに府県立女子学校は16校、東京府内で3年（1870年）から12年（1879年）までの間に設立された女子教育施設は24校ありました³⁾。

12年（1879年）9月に「教育令」が公布され、小学校を除き男女別学が明文化されました。15年（1882年）、東京女子師範学校に女子の高等教育機関として付属高等女学校が開校しました。小学校6年次修了以上で、修業年数は下等3年上等2年の計5年でした。また18年（1885年）には学習院から女子部が分離して宮内省所管の華族女学校が開校しましたが、その前後において私立の学校は全国各地で設立されました。

その後の法的な制度としては、24年（1891年）12月「中学校令」が改正され、第14条で高等女学校は「女子ニ須要ナル高等普通教育ヲ施ス所ニシテ尋常中学校ノ種類トス」として、普通教育を行う中等教育機関と定められました。また28年（1895年）1月に発布した「高等女学校規程」では「本令ニ依ラザル学校ハ高等女学校ト称スルコトヲ得ズ」と定められ、32年（1899年）2月「高等女学校令」が制定され、女学校が男子を対象とした中学校と同じ高等普通教育機関として認定されました。修業年限は4年を基本とし、地域事情に応じて3年または5年も可能でした。この法令が制定されたことで、府立の高等女学校が各地で設立されました。さらに43年（1910年）10月に「高等女学校令」が改正され、家政科目を主とする実科を設置し、実科のみを設置する高等女学校を実科高等女学校とする規定を設けました。このことから高等女学校の設置が、それまでの都市部から農村部まで広がり、高等女学校および高等女学校に類する各種学校の校数、生徒数は33年（1900年）107校1万532名から45年（1912年）371校8万3427名⁴⁾まで広がり、高等女学校への進学率も38年（1905年）2%が43年（1910年）には8%に達しました⁵⁾。

また高等女学校卒業生の高等教育機関として36年に「専門学校令」が発令され、女子専門学校が設立されることになり、34年に開学した日本女子大学校が専門学校として認可されています。

3 女学生の服装

女学生には一般的に学校側からによる服装規定がありますが、服装に対する費用は家庭負担であるため、この規定に沿った服装が私生活においても着用されることが多くみられます。そこで、女学生がどのような服装・髪形で自転車を利用していたかを考察するためには、服装様式・髪形の変遷を学校の規定を中心にして確認する必要があります。

江戸時代は身分と性による衣服の差別が厳然と存在していました。羽織・袴は士分層が着用するもので、その妻も含め女性は着用が禁じられていたのです。女性の服装は庶民層の労働着は別として、長めの袖と長い丈の着物に広幅の硬い帯を幾重にも巻く非活動的なものでした。

明治期に入り、男子学生は5年頃から次第に洋服が採用されていきましたが、東京女学校開校に際して、文部省は「女子従前ノ衣服ニテハ教場向不都合」であるため袴と羽織を着用させたいという意向から、「入学ノ女子著服の義ニ付伺」を太政官正院に提出しました。羽織・袴を女子に着用させるのは「一躰ノ風俗」にも関わる重大事であったため、伺い立てたのです。これに対して太政官左院は羽織・袴では「男女ノ差別」が立たなくなるので、袴だけとし、また「洋制ノ女服」も許してよいのではとの趣旨の上申を正院に提出し、この上申に対して正院は「袴ノミ著用致サシムベキコト」と回答し、「洋制ノ女服」については言及しませんでした。この結果、後の東京女子高等師範学校長となった中川謙二郎が述べている「男の着ける縞の袴をはいた、不思議な恰好をした女

子を見受けた」ことが起きたのです⁶⁾。また、東京女子師範学校の8年11月29日における開校式でも生徒たちは袴姿で皇后の来校を迎えています。同校生徒に対しては「紺色と浅黄色との立縞木綿袴（平袴形）が官給されてこれをはかせ、上衣は通常のもの」であり、外出時は随意であったので、制服であるといえます。明治10年の写真では生徒は一様に袴に羽織を着用しています⁷⁾。



写真4 東京女子師範学校

明治12年2月



写真5 東京女子師範学校

明治16年2月



写真6 東京女子師範学校

明治17年2月



写真7 東京高等師範学校女子部

明治19年2月

しかし、「今日我邦にも婦女子にして袴を着し昂然として毫も恥る意なし。その甚哉奇異の風体、実に国辱とも云うべし」（郵便報知新聞7年1月15日）、「女子といふものは髪形から着物までも艶くして総てやさしいのが宜いとおもいますに此節学校へかよふ女生徒を見ますに袴をはいて誠に醜くあらあらしい姿をいたすのはどういうふものでありますか」（読売新聞8年10月8日）など新聞紙面上で投書による批判が相次ぎました⁸⁾。女子生徒の袴着に対する世間の反発が強いためか、東京女子師範学校では12年1月頃から15年12月頃までは「袴を禁止して通常の青年女子と異なるところなからしめた（なかった）」ということで、12年から19年2月までの写真では一様に和服に帯を着用しています（写真4～7）。そして16年に文部省は女学校の服装に関して「風習ノ奇異浮華ニ走ルコトヲ戒ムルハ、教育上惣ニスヘカラサル儀ニ候」として、女子の袴着用を禁止しました。もっとも18年11月16日から体操のときは必ず袴と靴を着用し、教室並びに外出は随意という命令が学校から出され、臨時に文部省から袴と靴の費用が支給されました。

18年8月、東京女子師範学校は東京師範学校と合併し、翌年東京高等師範学校女子部に昇格した際に、「本校ノ女生徒ニ洋服ヲ着セシムルコトニ定ム」として、洋服が支給されました。19年7月から26年3月までの写真では、1870年代にヨーロッパで流行した胴を締め付け、腰当を使って腰を後方に膨らませるバussル・スタイルと呼ばれるワンピースまたはツーピースのロングスカートををはき、飾り付帽子を着けるという洋装になっています（写真8～11）。



写真8 東京高等師範学校女子部

明治19年7月



写真9 女子高等師範学校

明治24年7月・10月



写真10 女子高等師範学校

明治25年3月



写真11 女子高等師範学校

明治26年3月

この背景には16年11月28日に開館した鹿鳴館と政府の欧化政策とに関係していると言われています。18年2月13日の東京横浜毎日新聞に学習院と東京女子師範学校で舞踏を学教科に加えることを検討しているという記事が掲載されました。先述の中川は「生徒も洋装して課業に就くこととなり、学校では舞踏を稽古した」と述べています⁹⁾。19年6月23日に宮内大臣から「皇后宮ニ於テモ場合ニヨリ西洋服装御用并可相成」として洋服が取り入れられました。しかし、20年を過ぎてから欧化政策が行き詰まり、鹿鳴館における夜会での洋服率が低下し始めました。これは欧化主義の動きが反政府派の攻撃の格好の標的となることで衰退し、それに代わって国粹主義が台頭することになったのです。具体的には本田和子によると、校則として「教育ニ関スル勅語ノ趣旨ヲ奉体シ」「女子ノ本性ニ順ヒテ」などの一文を掲げて国策への協力を約束しはじめ、洋装の廃

止もその一環だった¹⁰⁾ というのはです。その例として23年3月に東京高等師範学校女子部から分離独立した女子高等師範学校は前述の洋装規定を26年から27年頃に廃止しています。同校の写真では26年3月までは洋服ですが、同年7月以降は和服になっています(写真12・13)。

校史でも「一時流行を極めた婦人の洋装も、漸く影をひそめて来たので、本校の生徒も次第に和服に戻って、27年の卒業生は皆和服を着用した」とあります¹¹⁾。

15年に開校
2月に東京高等
私費で調製する
華ニ流ルベカ
従って東京師範
等師範学校まで
の間は20年の



写真12 女子高等師範学校 明治26年7月・11月

ますが24年から全員が和服になっています¹²⁾。この相
いて、服装規定がないことで世論や流行の影響を受けて
が判断した結果であり、このため24年以降も洋装が断
実施されていた可能性がある」と難波知子は指摘していま

18年11月、学習院女子部から分離独立して華族女
宮内省所管として開校した際に、次のような服装規定が
れました。



違につ
各家庭
続的に
す¹³⁾。
学校が
制定さ

写真13 女子高等師範学校 明治32年3月

- ①袴ヲ着シ靴ヲ穿クベシ ②表衣ハ随意トス ③袴ハ縞ヲ除クノ外、色目・地紋随意タ
ルベシ ④西洋服ニテモ苦シカラズ

すなわち服装は和・洋とも認められていましたが、18年の第1期卒業写真では4名が全員洋服で
す¹⁴⁾。また20年6月から体操が教科として加わったことにより、生徒は洋服の着用が義務づけ
られ、生地や仕立て方法まで指定されました。これは華族女学校が皇后官の令旨によって誕生した
経緯から、皇后の洋装化等のため華族女子にも洋服着用の先導者となることが求められた結果であ
ると難波は指摘しており¹⁵⁾、東京女子師範学校の体操時の袴着用とは異なるものでした。もっと
も22年7月「校中盛式ノ日ヲ除クノ外和服著袴ニテ昇校不苦」、23年6月「式日ト雖モ和服洋
服何レニテモ着用随意」と変更が加えられ、服装は家庭の判断によるものに戻りました。

ここで再び登場するのが袴です。しかし、5年頃からの袴との決定的な違いは襠のないスカート
状の袴で、袴の下に締めるのは柔らかめの半幅帯だけで、俗に女袴とも呼ばれているものでした。
この女袴の起源は華族女学校学監であった下田歌子が、平安時代の宮中女性が用いた緋袴と男性が
用いた袴である指貫を折衷して考案したといわれていますがそれがいつであったかは不明です。3
2年5月発行の新撰東京名所図會¹⁶⁾では華族女学校の服装について「生徒の服装は、何れにても
着用随意たるべく、且和服着用の向きは、紋付に限らず(袴は縞を除くへし)揮て質素を旨とし華
奢に流れざらしむ」との記述がありますが、挿絵(写真14)を見ると全員が女袴を着用していま
す。この袴が華族女学校で取り入れられたのは機能性だけではなく、宮内省の直轄であったことに
より「貴族性・上流性」の象徴としての意味もあったためといわれています¹⁷⁾。

跡見学校は8年の開校当初から紫紺袴を着用することが定められ、創立者跡見花蹊は皇后陛下より
「婦人にはやはり緋の袴仕立にして、色は紫を用いたらよかろう」という直々の助言があったとい
うことで、紫紺袴を着用し、その袴に合わせて着る着物は自由とすると定められていました¹⁸⁾。



写真14 東京名所図会 華族女学校

こうした変化を女子師範学校の卒業写真からまとめると以下ようになります。

- 12年～19年2月 着流し
- 19年7月～26年3月 洋装
- 26年7月～32年 着流し
- 33年～ 女袴

なぜ33年以降ほとんどの女学生の服装が女袴となったのか、その理由をいろいろな文献からまとめてみると次の点が挙げられます。32年に東京女子高等師範学校が金属バックルのベルト付袴を制服として制定した（写真15）こと、「高等女学校令」が施行されて全国各府県に女学校が開設されたこと、教育界には女子にも運動をさせることが必要という風潮が高まり着流し（普通の着物）より機能性にすぐれていたこと、華族女学校の華やかで優雅な淑女ぶりとして象徴されていた¹⁹⁾などから、これまで華族女学校の海老茶、跡見の紫に限られていた女袴姿の女学生が全国に広まったと考えられます。



写真15 女子高等師範学校 明治33年

[引用文献]

- 1) 稲垣恭子 「女学校と女学生」 中公文庫 2007年 4ページ
- 2) 難波知子 「学校制服の文化史」 創元社 2012年 5ページ他

- 3) 手塚竜麿 「東京の女子教育」 東京都 1961年 16・28ページ
- 4) 稲垣恭子 「女学校と女学生」 中公文庫 2007年 184ページ(元文献は文部省年報)
- 5) 稲垣恭子 「女学校と女学生」 中公文庫 2007年 6ページ(元文献は文部省年報)
- 6) お茶の水女子大学百年史刊行委員会 「お茶の水女子大学百年史」 お茶の水女子大学 1984年 46ページ
- 7) お茶の水女子大学百年史刊行委員会 「お茶の水女子大学百年史」 お茶の水女子大学 1984年 48ページ
- 8) 国立国会図書館 第148回常設展示女学生らいふ 第一章女学生・イメージの変遷 女学生事始 より引用
- 9) お茶の水女子大学百年史刊行委員会 「お茶の水女子大学百年史」 お茶の水女子大学 1984年 49ページ
- 10) 本田和子 「女学生の系譜・増補版 彩色される明治」 青弓社 2012 60ページ
- 11) 「東京女子高等師範学校六十年史」(復刻版) 第一書房 1981年 64ページ
- 12) 難波知子 「学校制服の文化史」 創元社 2012年 49～50ページに19年から23年までの写真が掲載されている
- 13) 難波知子 「学校制服の文化史」 創元社 2012年 52～53ページ
- 14) 黒岩比佐子 「明治のお嬢さま」 角川選書 2008年 31ページに写真が掲載されている
- 15) 難波知子 「学校制服の文化史」 創元社 2012年 55ページ
- 16) 風俗画報臨時増刊「新撰東京名所図會」第189号 東陽堂 1899年 11ページ
- 17) 本田和子 「女学生の系譜・増補版 彩色される明治」 青弓社 2012 65ページ
- 18) 一三〇年史編集委員会 「跡見学園——一三〇年の伝統と創造」 跡見学園 2005年 49ページ
- 19) 本田和子 「女学生の系譜・増補版 彩色される明治」 青弓社 2012年 65～66ページ

[参考資料]

本田和子 「女学生の系譜・増補版 彩色される明治」 青弓社 2012年
難波知子 「学校制服の文化史」 創元社 2012年
佐伯順子 「明治<美人>論 メディアは女性をどう変えたか」 NHKブックス 2012年
黒岩比佐子 「明治のお嬢さま」 角川選書 2008年
稲垣恭子 「女学校と女学生」 中公文庫 2007年
学習院大学五十年史 上巻 平成12年3月31日 学習院大学五十年史編纂委員会
アリス・ベーコン 久野明子訳 「華族女学校教師の見た明治日本の内側」 中央公論社 1994年
斎藤美奈子 「モダンガール論」 文春文庫 2003年

[写真出典]

写真1～3・15 自転車文化センター所蔵
写真7～14 お茶の水女子大学デジタルアーカイブズより

*次回「自転車に乗った女学生(2)」を予定しておりますのでご期待下さい。

最近私が読んだ本

BCC学芸員 谷田貝一男

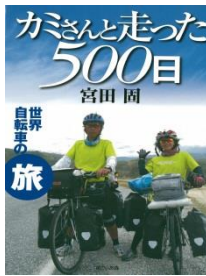
【紀行】

「カミさんと走った500日 世界自転車の旅」 宮田 固 めでいあ森 1300円＋税

「シルバー夫婦のきままなヨーロッパ・サイクリング記」 高桑明 風詠社 1100円＋税

「キューバ自転車横断紀行」 小林建一 彩流社 1900円＋税

ほとんどの人はこれらの本を読んだとき、「60代から70代の男が、よくこれだけの国々を自転車で廻ることが出来たね」という感想を持つのではないのでしょうか。時には過酷な天候や劣悪な道路に何度も苦しめられることもあります。現地の人たちの温かい人情がそれを乗り越えさせてくれ、さらに先を行こうという気持ちを起こさせてくれています。また一度は行ったことのある国や都市も出てくるかも知れませんが、鉄道とバスを乗り継いで行った旅行とは視線の異なる風景が随所に出てきて、そんな魅力もあったのかと改めて教えてくれることも多くあります。まさしく自転車旅行の醍醐味が伝わってくる旅行記と言える3冊です。



【道路】

「横丁と路地を歩く」 小林一郎 柏書房 2000円＋税

表通りから一本裏通りに入ると、細い道や角の先が見通せない道に出会うことが有ります。そのような道に入って行くとその先に何が有るのだろうか、そのまま通り抜けることができるのだろうか、期待感と不安感を持ちながら進むと小さな小売店や飲食店が並んでいたり、あるいは植木鉢が置いてある家々が有ったりと新たな発見があるかも知れません。それらが横丁や路地の魅力だそうです。

横丁と路地の誕生の歴史、全国のネーミングのある横丁と路地の魅力の紹介、横丁や路地と出会ったときのチェックポイントが丁寧に書かれています。ポタリングのお供にあってもよい1冊かもしれません。



「ふしぎな国道」 佐藤健太郎 講談社現代新書 980円＋税

国道というと、通行量の多い幹線道路のイメージですが、階段のある国道や歩くのも困難な山間部の国道などはテレビでも紹介され、知っている人も多いでしょう。しかし、不思議な国道、謎めいた国道も全国津々浦々にあります。どんな不思議なのか、何が謎なのか、それはこの本を読んでもと解ります。国道の他に都道府県道も取り上げています。写真も豊富で、今まで何気なく通っていた道が単なるコンクリートの平面ではなく、その下に道の歴史と魂といったものが隠れていることが解ってきます。本書と「国道の謎」(松波成行著 祥伝社新書)と併せて読むと、ツーリングの際の新たな楽しみが湧いてくるでしょう。



「東京都市計画の遺産 防災・復興・オリンピック」 越澤明 筑摩書房ちくま新書 980円＋税



著者は都市計画の歴史研究に関する第一人者で、特に東京における関東大震災と第二次世界大戦後の復興に関して多くの著書があります。復興後の街づくり並びにオリンピック開催のための基盤造りの基本となる道路、その道路の改修と拡幅に関する成功例と失敗例が写真とともに詳細に記載されています。また、「防災まちづくりー来たるべき首都地震に備えて」の章では多くの道路を取り上げて、歴史と問題個所をやはり多くの写真を使って紹介しています。都内や近郊にお住まいの方には身近な道路もありますので、ぜひ一度行ってみるのもよいのではないのでしょうか。ただし地図が掲載されていないため、土地感のない人には難しいかもしれません。

【物語】

「イカロス・レポート」 竹田真太郎 講談社 1500円＋税



ある大学のサイクリング同好会に所属する坂崎基樹は、高校時代の友人から鳥人間コンテストのペダルをこいでプロペラを回すパイロットに誘われました。最初は断ったものの、飛行機サークルの下級生に一目惚れしたため、パイロットの特訓を始めます。ところが卒業して退任したはずの前パイロットが復帰したいと申し出たのです。そこでヒルクライムレースで勝利した者がパイロットになるという勝負になりました。ヒルクライムを得意とする坂崎はこれに勝利して、鳥人間コンテスト優勝を目指して改めて特訓に入ります。イカロスとはギリシャ神話に登場する人物で、羽を付けて飛んだものの、途中で羽がとれて海に墜落してしまいます。

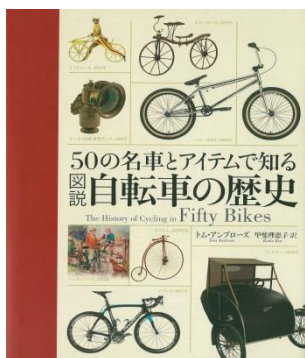
【歴史】

「スリーキングダム 自転車物語」 角田安正 八重洲出版 1800円＋税

日本人による自転車の歴史書が久しぶりに出版されました。従来の自転車の歴史書というと、経済や社会との関わりを中心に事実関係を淡々と書き綴ったものがほとんどでした。ところが本書は小説仕立てになっているのが特徴です。豊富な史料に裏付けされているので小説仕立てですら大変読みやすくなっています。特に著者の真髓を発揮しているのが日本の自転車製造の礎を築いた人たちの物語です。例えば、新家工業の新家熊吉と日米商店の岡崎久次郎の友情と駆け引きの様子などが、正に再現ドラマを見ているように描かれています。これこそが歴史の本質ともいえます。現在、戦後篇を執筆中とのこと、どのような内容になるのか期待されます。



「図説自転車の歴史 50の名車とアイテムで知る」 トム・アンブローズ（甲斐理恵子訳） 原書房 2800円＋税



1779年の自転車の原型から2011年のピナレロまでの間、その時代の名車と呼ばれる自転車を取り上げて、そのエピソードから歴史を語っています。写真が多く掲載されていますので、この写真を見るだけでもおよその歴史はわかるのですが、本書の特徴はエピソードにあります。自転車の特徴だけではなく、誕生までに関わった人物像、レースにまつわる逸話、自転車と社会環境との関係など様々なエピソードが盛り込まれています。さらに50のアイテムの中にはタイヤ、ランプ、変速ギヤ、ディレーラーなどのパーツも含まれています。歴史書ですが、自転車好きの人たちが集まれば本書で何時間も自転車談義ができる、不思議な本です。